

算
根
集

算
根
集

(非 売 品)

ノートルダム 清心女子大学 古典叢書第五回配本「草根集」三恋

昭和四十三年九月二十日発行

刊行責任者

シスター・セント・ジョン

翻刻責任者

白 井 た つ 子

発 行 所

岡山市伊福町二丁目一六の九

ノートルダム 清心女子大学 国文学研究室古典叢書刊行会

(振替 岡山・七二三
電話五二一一五五)

印 刷 所

姫路市別所町 岸本印刷株式会社

草根集 三 目 次

恋 (上) 1

恋 (下) 101

草 根 集 (戀上)

次第不同

戀

六三九八 六 身のうさを思ひしるとて恨すは人の心のなきになさまし

六三九九 七 なかめわひむなしき空にみつしほやからき恨の行ゑとふらん

六四〇〇 十一 さ夜衣猶うらめしきうつゝかなかへしてみぬを夢になせとも

六四〇一 山たかみ隔てし身を心なと霞のうちの花にそむらん

六四〇二 十四 身にとまれひなの長路のすゑまでは傳へきかれん戀のかせかは

恨

六四〇三 十二 浦波やうき身にかへり入しほのからくもいはぬむねにみちぬる

六四〇四 十四 むねにたくもしほのけふり消やられて身を浦風にかへる波かな

別

六四〇五 二 引とめよしたふ別のうしろても見えず夜ふかき床の黒かみ

思

六四〇六 三 さしこもるむくらの宿の思草はひあふ床はねんかたもなし

草 根 集 次第不同戀部二字題

初 戀

六四〇七

一 浅からぬ色にそ見ゆる紅の涙ふりいつる袖の初しほ

六四〇八

六四〇九

思ひつゝあかしならはぬ初鳥のねにたてすともしる人もかな
わか心けにおもふともさためなき袖の時雨にぬれはしめつゝ

六四一〇

初かりのなきても思ひつきせすはこえしよ秋の峯の朝霧

六四一一

二 露分て思ひ入壁の初尾花いつしかよそにぬるゝ袖哉

六四一二

三 うたゝねの袂の露の新結枕まてとはおもひかけすよ

六四一三

またしらぬ心のおくの初を花みたれて露や袖にみゆらん

六四一四

入初る思ひの煙たえせすは戀の山柴焼(たき)やつくさむ

六四一五

六 たき初る思ひの薪いつこりてしらぬ山ちに煙たつらん

六四一六

つゝめ先高ねの花の雲霞のちに心の色はちるとも

六四一七

かゝりきといはゝや春の初卯杖心にもまたふりぬ思ひを

六四一八

深からむ色ともしらす紅の一はな衣したにそめつゝ

六四一九

こもりゐて戀をもしらすぬはしたかを初とやいたす君はうらめし

六四二〇

涙のみふるのゝ露にまかふらしまた初せちに思ひ入身は

六四二一

契あらは初もとゆひの紫に結ふはかりのねをや尋ん

六四二二

思ふ事ほにあらはさむ爍の田も初いねをこそ神もうくらめ

六四二三

したもえにたくとしらすや夕ま暮見そめる崎のあまのいさり火

六四二四

思ふより下に焼火(たくり)の色そき時雨は染ぬ爍の初しほ

六四二五

おはりとやなしてやみなんほのかにもみるを思ひの今日のはしめに

六四二六

我そいま袖まきかくす初かりの涙も文もつゝみやはする

六四二七

忘はやたゝこよひこそみすもあらぬ面影はかり新枕すれ

六四二八

紅のまた初しほも袖に見しけふそのに出て花のすゑつむ

六四二九

おもふよりやかてうき身を秋の田のはつほの露の色に出つゝ

六四三〇

煙たてやけとも爍は初しほのうらかにたへぬ嶋のあま

六四三一

それかとよ戀のやつこにこととはんゆけはくるしき心つかひを

六四三二

末しらぬ戀ちにむかふ一足をふみさためぬも先そくるしき

六四三三

はゝきとる袖に初ねの玉そ散はらひもあへすちりの思ひを

六四三四

夕まくれ立出てきけは我心契田面のはつかりそなく

六四三五

あらはれし富士の高ねの初けふりたか思ひよりなひき出けん

六四三六

妖風に露そこほるゝ初いねの一ほいてしとつゝむおもひは

六四三六 こほるゝ一ほるゝ

逢 戀

六四三七

一行末もあらはなとかとあはぬまはおしからぬ身と思ひなりぬる

六四三八

これはみな夢かとたにももろともにいにはぬにつくる夜はのことは

六四三九

人もまた夢とたとらはたのめをけ今夜のゝちにしらんうつゝを

六四四〇

いつれをか先あらはさむねし床のまくらのちりとつものことは

六四四一

三 よしさらは初てまけよさ夜衣うらなきまでの心くらへに

六四四二

六 吉壁川よとむ氷を春ときていもせにむすふ中の瀧つせ

六四四三

夢に猶なせとなひそ今夜たに思ひねなりし心ならひに

六四四四

よしさらはあくるもしらしとめかたき人をも身をもなきになしつゝ

六四四五

契ありてあふ夜に成ぬ身のためにけふをよき日と後もおもはん

六四四六

さ夜衣ぬれにし袖をまきかへしおもひなき身になしてみえぬる

六四四七

七 あふことそくらき夜の夢月の色嵐の聲はねぬになせとも

六四四八

九 をしへをけおもひさむへき道もなしなにと今夜を夢になせとも

六四四九

十 我ために契ありける前の昔そ先あふ事にそへてうれしき

六四五〇

こよひかつとけて後せの山かつらかさねてかけよ衣／＼のそら

六四五一

横雲もひけとそかへるむつこともまた月弓の有明の空

六四五二

あひ見るは夢かととふもこたへせすたれをしるへに思ひさためん

六四五三

十二

手枕に我とはかさし今夜たにひかたき袖そぬれしまゝなる

六四五四

夜はふかしはしうちいつるむつこともまた月影の西にならすは

六四五五

十三

入こすはうき身も見えし櫛の戸を我たゆめつと人やおもはん

六四五六

十四*

中たえし夜ゝの涙にむせかへり恨所のあるかひもなし

六四五六 十四ナシ

六四五七

下ひものとくる玉のは玉ゆらにいつのむかしのえにか結ひし

六四五八

残

おもひねの夢ならずともかはらしな君かくる夜のさめん別は

六四五九

うつゝとおもひもわかぬあふことを夢になせとのことはもうし

六四六〇

今夜かく下ものひもときます氷やもとの涙なるらん

六四六一

またれつゝ今夜そ心あひのかせ吹なりよりこ床のうら舟

見 戀

六四六二

十二

かりそむる見るめにあらき浪なくは磯たちなれて袖やぬらさん

六四六二 見るめー見る

六四六三

我かたによらはそちかのうらなれむつらきみるめのよその浪かせ

六四六四

十三

わすられぬ人のすかたをうつしてもめかれぬへくは筆やうらみん

六四六五

雲まよりさやにも見てしかひかねは雪に思ひをかさねてそふる

戀上

六四六六

我そかる見るめをかりのすかたとも思ひなされぬあまの心を

六四六七

十三

よそに見るめもかれく成ゆけは契らぬさきにうき身をそしる

六四六八

十四

よそなから宿の妹かせ身にそしむめに立雲の峯の夕暮

六四六九

吹風をめに見ぬ奈のさはくにもむねあひかたき中のさ衣

忍 戀

六四七〇

一

しるへせよ心のおくに分かねてまよふしのふの山のした道

六四七一

せめてたゝひとりにもらす思ひにてなへてをもらす舌をはなけかし

六四七二

宿さへも軒のしのふの草かくれやつれて人にありとしられし

六四七三

ころもへぬしのふのみたれかきりあらは心のおくの露や見えまし

六四七四

にこるともすむともしらしおく山の岩かき淵のその心を

六四七五

雲うつむ遠山はたのなるこなわ心ひくともいかゝしられん

六四七六

二

涙川袖のしからみひまもなしすゑや心のそこくゝるらん

六四七七

一

目かるなよ心の色のうつろふもけにはあたなる花のすかたそ

六四七八

わたつ海のおまのすさみのみるめたに思ひいらすはかれやはてまし

六四七九

あまをふねさしかへるともかけをたになとか出見のうらに住月

六四八〇

二

浪たかみ入ぬるいそによる草も見るめすくなくかるゝ中哉

六四八一

なにかせんそくの契もあさか山かけたえはてぬ水は有とも

六四八二

三

くるしさをいとはしよしやいつきても見るめにあかぬあまのしわさは 六四八二 いとはしーいとは、

六四八三

にほの海や渚の浪にとままるものよりくる見るめ也けり

六四八四

おもふとてさのみ見るめはつゝめとも心のゆくをせくかたそなき

六四八五

六

うちつけのめをうたかへる心にもあらぬおもひの色そそひゆく

六四八六

我にうき君は朝日の影なれやさしむかはれぬ泪こほれて

六四八七

命かもあふことなみのうきなから南の風による名はかりを

六四八八

めにかゝる浪をそいとふあま人のほすひまもなき

六四八九

しのふれはさたかにむかふ時そとも涙まきれぬ袖そ朽ゆく

六四九〇

七

おもひそふ見るめのとかを人になり我にかはりていさめわひぬる

六四九一

くるゝまの花のおもかけ身にそはゝねても別し春のよの夢

六四九二

九

ほのみゆる霞のうちのにほひゆへ花におもひの色そそひゆく

六四九三

きり捨て見るめはなにのとかゝあらむ人に心をつくすきつなを

六四九四

十

いつよりかつらきおもかけへたゝりて涙にむかふ人となりけん

六四九五

つゝめとも身はおもはぬ涙ともおちてしらるゝ袖の上哉

六四九六

なをそせくさては心の行かたもしらぬ忍の山の下水

六四八三 に一ナシ

- 六四九七 三 煙たにたてぬ忍のうらさひてやくとな見えそあまのもしほ火
- 六四九八 六 いはし猶心のとふを心にてこたへこたへす人ししらすは
- 六四九九 風ふかぬ心の花におほふ袖ありともつゝむ色やちらまし
- 六五〇〇 うき中を見しれるさまにいふ人もなきやかへりて忍わふらん
- 六五〇一 おもふより心にしむるつまこめはまた程遠きよその八重かき
- 六五〇二 うちわひむとをき忍ふの山ひこはありとも人に聲はつたへし
- 六五〇三 おもふことしれは涙そ袖にもる身にも心を猶やへたてん
- 六五〇四 つゝましよおもふ思ひはいかにとも色そめかたき袖にまかせて
- 六五〇五 八 いつの舌かほす時ならむ紅の袖まきかくす露よ日かけよ
- 六五〇六 我袖の色そつれなき奈の葉も下紅葉する焔に時雨て
- 六五〇七 九 忍わひゑそか岩屋にこもるとも心のおくのうみやさはかむ
- 六五〇八 十二 跡もなくよせてかへるやそれならむ忍のうらにつもる年なみ
- 六五〇九 十三 見えやせし思忍ふの山めぐりしくるゝ袖を染もわたさて
- 六五一〇 思ひせくむねのうちとやなかめまし忍の軒にさはく村鳥
- 六五一一 十四 をよひなくかけし忍の山かつら心たかさはきゆるまもなし
- 六五一二 思ふよりうつろふ色そかくされぬ袖の時雨に雲はなくして

六五二三 残 つゝむともさそふ風あらはいかゝせむ身をうき草の袖のさゝ波

六五二四 いまよりの忍ふのみたれかきりある心をしるは哀也＊けり

六五二五 春日のゝ霞の袖にしきかくせみたれにけりな忍もちずり

六五二六 夕なきに浪はかけこて磯屋ふくあしの忍ひのうら風もうし

契 戀

六五二七 一 めくりあはむ夕を空に契てもはかなや今朝の月の行末

六五二八 わすれしの契の末もあやうきはわたりかけつる夢のうきはし

六五二九 結ひてし人に契の道なしや此舌ひとつにかけてしられん

六五三〇 三 つれなきを舌々の契にまかせてもかつうらみすは又やたえまし

六五三一 猶さりの道行ふりの袖に＊たにかゝる契はのかれなき舌を

六五三二 六 さりともと契をかけて忝山のなきうらたのむ末の白なみ

六五三三 契あり契なしともそのまゝにうらみしいはし舌々のえにこそ

六五三四 舌々かけて契の程をおもはすは人のつらさになしやはてまし

六五三五 八 いひいてゝこたへん時そ契あり契なしとも思ひしられん

六五三六 今見るもつれなき色そあさからぬ舌々の契の末の忝山

六五三七 九 たのめをけそれも契のありなしによゝはよるへきおふのうら浪

六五二四 也―なり

六五二五 かくせ―からせ

六五三一 袖にたに―袖にたに

戀上

六五二八

舌々かけてはねをならふる契にも八こゑの鳥の聲やうらみん

六五二九

十 かよひきてつくは山風吹むすへ鹿嶋の帯のかこと斗に

六五三〇

玉ほこの道行袖のすり衣こむ舌や戀の心みたれん

六五三一

爍の風草のは結ふ契たにうつろふ末は露そこほるゝ

六五三二

十一 前の舌の契ならずといふことのありやなしやもいまそしられん

六五三三

十二 人心なきたる磯のやとにきぬ契ありそのうみわたる舟

六五三四

つらしなと舌々にかけゝん涙ゆへ袖のみ朽てくちぬ契を

六五三五

うかりけるみたらし川のせをあさみむすふ契を神もふかめよ

六五三六

十三 立よれはおもふ戸口にまち出る人の契もふかき夜の月

六五三七

さきのよの契はありのすさみにや我おもふ人にわかうかりけん

六五三八

十四 たのむなりいひしことは^{のは}の末の松まつ夜の袖に浪はこせとも

六五三九

心をもさのみつくさし先の舌に契あらはとうちたのみつゝ

六五四〇

残* おもひ河さかまく水のうたかたも契あれはそめくりあふらん

六五四一

一夜ねて五百度生れるは^{か*}るとも契くちせぬ枕とそきく

六五四二

うき中をなかむる空の契さへ跡なし雲のわたる夕風

待 戀

六五四〇 残ナシ

六五四一 生れるは^かるゝ生れかはる

六五四三

六五四四

六五四五

六五四六

六五四七

六五四八

六五四九

六五五〇

六五五一

六五五二

六五五三

六五五四

六五五五

六五五六

六五五七

六五五八

戀上

たのめつゝいそく春日のくれかたみさらは長閑にそふ夜はもかな

たのめつゝとはて夜ことに過ぬれはいつれの時をわきてかこたん

かはりきぬやみのうつゝの風の聲ふけゆく袖の涙たつねて

戸もさゝすまた深ぬ夜(ふけ)そ人音のしつまるさへや契なるらん

深にけりありしに思なそらへてまたしとすれは待夜とそなる

なをそうき別路におひしくすのはのたちまつ庭にかへる殊風

あやしとや人の見るらん楨の戸も月なき比にさゝぬよひるを

たのめつゝまつ夜になさぬ心もてみれとも深るいさよひの月

まちわひぬまたしと思ふ偽のまことにあくる鳥の聲かな

月まつと人にはいはし中／＼にそのことのはそふりてしられん

まつ夜とはおもひれしうたゝねもやすくはふけぬ闇の内かな

さちあかす人もねしよの枕かにこかるゝむねを猶おさへつゝ

たつねくる友もうらめしひとりめて契さはらすたのむ夕を

いひし日をたかへけるかと又そまつたのめてあくる後の夕暮

たのむ夜のしるしはかりに楨の戸をほそめて月に心見えぬる

さたまらぬ舌は思はすのこともあれたのめたのますまたぬよそなき

六五四六
夜そゝ夜に

六五五九

立ぬるゝあかつき露の奈のはに落たる月の袖もうらめし

六五六〇

十一 たのみても深行(ふけゆく)ほとに身をしるを雨のよならぬ月そあやしき

六五六一

十二 さりともと心なくさの濱ひさしさすや夕日の奈にかゝれる

六五六二

十三 待かねぬ夜のまのこけに鳥もねよきかし深ゆく時のつゝみを

六五六三

つれなさをかこつはたより在明の月みぬ空そまつよむなしき

六五六四

十四 宿いてんたのめぬ夜はのふけ行になすもなされぬ庭の奈風

六五六五

残 君か代を松にもよせしたのめてし一夜も千代をふる身ならずや

六五六六

まつよひの榎の戸口はあけをかし夏にもあらず月もなき比

六五六七

をくらすよ暁露に立ぬれてまつを別のあさちふのかせ

別 戀

六五六八

一 うかれゆく玉とたにみよ露はらふ身は白妙の袖の別路

六五六九

もろともにいさなひいてし榎の戸にのこるは月や送らさるらん

六五七〇

衣くにかへる心のひかふるや夜のまにおふる葛の下道

六五七一

きぬくの空に見れとも暁の雲に別をゆつるよもなし

六五七二

三 猶そうき影のこらしと入月にくらき涙の袖のわかれ路

六五七三

かへりこむ葛のはならて露けきは別路におふる道の芝草

六五七四

六

あかさりし袖の別の月よたゝ我さへ空をゆく心ちして

六五七五

なからへんもとの別にたへてこそ今夜あひ見る命ともなれ

六五七六

草も木もおもかけならぬ色そなきうき衣のしのゝめの道

六五七七

朝鳥のは風おちくる衣に軒の忍の露そ身にしむ

六五七八

しはしとてひかふる衣のうしろ手にとりそへらるゝ黒かみもうし

六五七九

衣のちかきかたみかねし床の涙もいまたあたゝかにして

六五八〇

たれかねし袖の別の道の露草の袂は猶そしほるゝ

六五八一

七

よしさらは涙かさねよ衣のたもと夜ふかき月のやとるに

六五八二

衣の人にかはりてやとる也袖をまちとる道芝の露

六五八三

八

明ぬまにやらひやりぬと思はれん月さへつらし影かくしてよ

六五八四

衣の人にかはらぬよこ雲の別なれたる空もうらめし

六五八五

九

したはれぬ人にかはりて衣のもすそひかふる道のさゝ原

六五八六

雲風もわかれよととみれはうしなに心なく明る此夜を

六五八七

衣の袖のしづくもかけ見えぬかたみの水や床にかはかん

六五八八

夜ふかしとおもはむ露の心をもぬれはつる道のさゝ原

六五八九

十

きぬの庭の真砂をふむくつも音をたてしとくたく心そ